

先日、ある父子の挑戦を追ったテレビ番組が放送されました。パーキンソン病で闘病中の父親が、息子のAさんと、八十キロの道のりを自転車で踏破するというものでした。

舞台は広島県尾道市と愛媛県今治市をつなぐ「しまなみ海道」。海峡を眼下に、アツプダウンの激しい道を進むコースです。

父親は、もともと趣味としてサイクリングをしていました。リハビリを続ける中で、しまなみ海道走破の夢が再燃。「同じ病の人たちにも元気を与えたい」という想いに、息子のAさんが応えたのです。

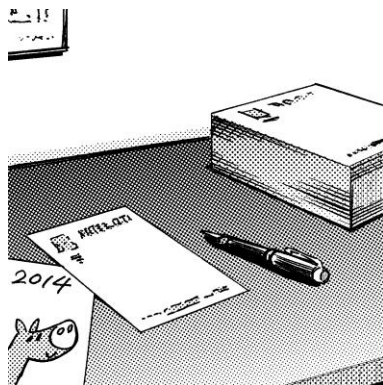
十年前にパーキンソン病を発症して以来、父親はほとんど自転車にまたがることはありませんでした。体は痩せ細っていましたが、二人三脚で日々のトレーニングを重ねて、いよいよ当日を迎えます。

出発から五時間が経過した頃、疲労により平衡感覚が麻痺して、手足が思うように動かなくなりました。転倒を繰り返して、Aさんもこのままだと難しいと思ったそうです。しかし二日目、前日の遅れを取り戻そうとする父の必死な姿に、Aさんも坂道で背中を押しながら懸命にサポートを続けました。

三日目、家族や地元の人たちなど大勢の応援者が待つゴールに無事到着。みごとに夢を果たした父は「息子のお陰」と、何度も何度も口にするのでした。

今回の挑戦の背景には、父親の肉体的なハンデに加えて、親子関係の課題もありました。

病気が教えてくれた かけがえのない絆



絵・今谷 鉄柱

パーキンソン病を発症した当時、父親はAさんの介護を決して受けつけなかったそうです。息子の世話にはならないという父のプライドがあり、意見のぶつかり合いも度々ありました。そのため、Aさん自身、父をなかなか受け容れられませんでした。

しかし、トレーニング中のある日、父親の服の着替えを手伝いながら、表情の固かった父の目に、涙が浮かんでいるのを見ました。その瞬間、改めて父親の心の奥にある深い想いにふれた気がして、「なんとか夢を叶えてあげたい」と思ったのです。

ゴール直後、Aさんは息を切らしながら、テレビのインタビューでこう語っていました。「病気は治る、治らないではなく、気持ち一つで素晴らしいことがある」。病気を乗り越えるというよりも、まさに、病気によって、親子の絆が強まったのでしよう。

倫理研究所の会長・丸山竹秋は、病について次のように述べています。

持病はないにこしたことはない。しかしどうしても治らないときは、その見方を変えることだ。つまり「自分のこの持病があるからこそ、かえって自分を守ってくれている」と、むしろ持病に感謝する。これは単に気持ちだけの問題ではない。事実がそうなのだ。持病は守り神なのだ。『つねに活路あり』丸山竹秋

病気は苦しいものですが、守ってくれる家族の存在を感じた時、病気の本当の意味が見い出せるのかもしれない。